

1. 本園の教育目標

- ・あいさつや返事がきちんとと言える子に
- ・きまりややくそくが守れる子に
- ・おもいやりの心と人に親切にできる子に
- ・感じ感動する豊かな心の子に
- ・自分で考え実現できる子に

2. 本年度重点的に取り組む目標・計画

未就園時期にコロナにより子ども同士で関わる機会を奪われた子どもたちの、コミュニケーションや運動面での負の影響に対しての研究と対策やケア。また、質の高い幼児教育を実現するため、子どもたちや保護者はもとより、広く社会から尊敬され、信頼される教職員を目指す。

3. 評価項目の達成及び取り組み状況

評価項目	評価	取り組み状況
カリキュラムを見直し改善を図る	A	<ul style="list-style-type: none"> ・イギリス人のネイティブスピーカーを英語講師として招き、英語レッスンを実施する。 ・身体を動かしながら楽しく英語を学ぶことで、恥ずかしがりやさんでも堂々とした振る舞いを身につける。 ・健康運動実践指導者資格を有する講師により園児たちに楽しみながら身体の使い方、動かし方等運動の動作を身につけさせる。 ・体育指導を通して身体の柔軟性、筋力、瞬発力等を養い、体力向上や怪我の防止につなげる。
保育の計画性	A	<ul style="list-style-type: none"> ・園の教育方針、教育目標、年間目標に基づき教育課程を編成し、年度始めに職員会議にて共通理解を行う。 ・職員会議を週に1回、主任会議、学年会議を適宜行い、教育計画を実践する。
保育のあり方、子どもへの対応	A	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりの発達、特性を職員会議で報告、情報共有し、全教員が共通理解の上、子どもの実態に合わせた保育、援助を行う。 ・芝生園庭や園庭に整備したビオトープ、ちびっこ農園を活用し、思いきり走り、飛び、更には様々な動植物に触れ心身ともに限りない成長をめざす。 ・教職員相互にこまめな報連相、連携し、子ども一人ひとりの幼児理解に努め、チーム保育を遂行することで同僚性を育む。
保護者への対応	A	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援の必要な子どもに関しては発達センターや保護者と連携し、情報を共有し、日々の保育に役立てる。 ・園の様子を園だより（週だより、月だより）やHP、インスタグラムで定期的に発信する。また担任との連絡帳での対応の他、5月の個人面談や保護者の希望により常時面談や保育を見学する機会を設け理解と関わりを深める。

地域や社会との関わり	B	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の幼保小連絡会にて連携を行い、小学校就学に向けた情報交換や小学校への参観会を行う。 ・自己啓発の小冊子を用いた朝礼で教職員自らの考えや理想、目標を発表し合い、自己実現や人間性の向上に役立てる。
------------	---	--

評価（A…十分に成果があった B…成果があった C…少し成果があった D…成果がなかった）

4. 総合的な評価結果

評価	理由
B	<p>外部講師を招くなど新たなアプローチでの保育活動を実施することで、重点目標は概ね実施できたが、引き続き継続的な取り組みが必要と思われる。定期的な職員会議を行うことで、職員全体で一人ひとりの子どもを育てるという意識が強まり、課題のある子どもに対しては共通理解と協力体制を築きチームで保育をすることができた。表現活動や集団活動において、子どもの考えや思いを受け止めるとともに、みんなで共通の目的を達成するために必要な環境を用意し、子どもの状況を見つつ適度に援助することができた。保護者への対応は、保護者のニーズについて情報を収集し、教職員同士で密に報連相することで、多重的に声をかけるなど温かい雰囲気で包み込むことができた。まだまだキャリアのある教職員頼りな面が多々あるので、経験の浅い教職員も各々の感性を更にブラッシュアップし、チームとしては底上げしていく必要がある。</p>

評価（A…十分に成果があった B…成果があった C…少し成果があった D…成果がなかった）

5. 今後取り組む課題

課題	具体的な取り組み方法
環境	<p>質の高い保育を充実させるために、これまでのカリキュラムを見なおし、幼稚園本来のビジョン、教育目標から逸脱しないことを念頭に、保育計画を立案、実施していく必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園児や保護者のみならず、教職員も笑顔が絶えない心温まる環境の向上を目指す。
特別支援事業への理解	<ul style="list-style-type: none"> ・障害についての学習に努め、理解を深める。三鷹市発達支援センターの巡回相談を要請し、個別の指導を受ける。
保育	<ul style="list-style-type: none"> ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を意識した日常保育に努める。

6. 学校関係者評価委員会の評価

本評価は概ね妥当であると認める。ネイティブスピーカーの講師を招くことにより、簡単な単語や発音を覚え、外国人の講師をはじめ、外国人のお友だちに言葉が通じる喜びを感じられたようである。帰宅後にその日習った英語の歌を歌ったり踊ったりする姿や、園外で出会った外国人に積極的にコミュニケーションをはかりにいった子もいたそうである。また、内向的だった子がクラスの外国人のお友だちともっと仲良くなりたい、話せるようになりたいという理由から課外の英語教室にも通いたいと言うようになったという話も聞かれた。英語に興味を持たせるという点で取り組みは成功したと思われるが、英語が定着するまでにはまだまだ時間がかかると思われるので、今後も継続的な取り組みを期待する。幼稚園では日々あいさつや返事の大切さを保育の中で伝えているが、体操を開始したことにより、今まで以上にはきはきとした、声に変化がみられる子が多く見られた。放課後の時間にその日教えてもらったことや、面白い動き等を保護者に嬉しそうに見せたり、もっとやりたいという声も聞かれた。運動能力向上のめざましい変化はまだないが、伸び伸びと体を動かし楽しむことは、食事や睡眠にもよい影響があると思われる。保護者としても専門の講師に体の使い方を教えてもらえるこの取り組みを満足している。

園内保育技術研究会や職員会議などを活用し、教職員一丸となって子どもたちの成長や喜びを考えた保育を工夫し、一人ひとりを大切にしながら実践している様子は大変好ましい。引き続き子どもたちが楽しく園生活を送れるよう保育の充実を期待する。